

パソコンで頭考(ずこう)しよう!!!

石川県・金沢市立長田町小学校 福田満佐子

◇ 図工(頭考)の3つのキーワード

「図工の時間は、自分らしさ(感じたこと・思ったこと・考えたこと)を、自分なりに(自分のイメージにぴったりの表し方・材料を使って)色や形で表現して、自分だけの(世界中にたったひとつの)作品を創りあげる時間」「図工は“頭考”これが、子どもたちと私の図工・頭考の時間のキーワードです。

◇ なんとって心強い“助っ人ツール”

平成6年、あるきっかけで、図工科の活動に於けるパソコンの活用方法を考え実践する機会を得ました。「実際に“手”で描いて、つくってこそが“図工”では?’という一抹の疑問のもとスタートしたので、まずは描くというよりも、構成・構想の手助けとしての活用方法を考えることにしました。この“助っ人ツール”としての活用方法は「パソコンで頭考のHow to」の1ジャンルとしてとして、今も健在です。



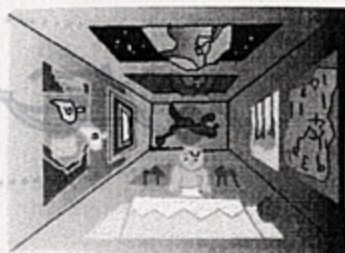
『マイ・ブックカバー』『マジカル・クロス』…図形ソフトを使って、好きなマークをデザインし、コピー機能を用いて並べ方を工夫したり、大きさに変化をつけたり、形を変形させてバリエーションを増やしたりして、ブックカバーや用途に合った布地のデザインを考えるといった活動です。それまでは同じような題材にのぞむ場合、折り紙で貼ったり、絵の具やカラーペンで塗ったりする活動が主で、肝心の構成を工夫する部分に充てる時間が不足しがちでした。パソコンを使うことで、やり直しが容易にできることから、子どもたちは生き生きと活動し、ステキな作品が生まれました。

『黒と白の虫』 木版画で版木に白黒の配分を考えながら墨を塗っていく活動は、時間と手間に比べ子どもたちの思い通りにならないことが悩みの種でした。その活動をパソコンを使ったことで時間が短縮され、その分「彫り」に充てる時間が保証されて、作品の完成度も子どもたちの充実感も高まったようでした。

◇ “マウスは筆”と教えてくれた子どもたち

いくつかの実践を経る中、私はパソコンに向かっているときの子どもたちの瞳の輝きにはっとさせられました。子どもたちにとって、筆やパスで描いたり、はさみやのりで作ったりすることと、パソコンを使って造形表現することは何の違いもないことに気づきました。子どもたちにとって、「マウスは筆」。まさに「目から鱗」、私にとって「パソコンで頭考」の転機でした。この時から多様な表現方法・描画材料の一つとして“パソコン”が加わりました。

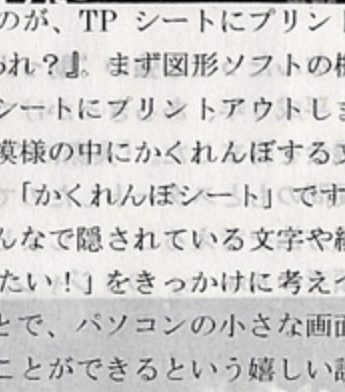
その頃タイムリーにもパソコンによる描画のコンクールがあり、これを目標に制作しました。子どもたちは柔軟な発想で、パソコンの多様な機能を慣れた手つきで使いこなしアレンジし活用して製作し、このコンクールでは上位入賞を果たしました。



順風満帆に「パソコンで頭考」する日が続いたある日のこと、作品をプリントアウトすると、きまって「あれえ、なんかイメージが違う」との声。液晶画面の色とプリントアウトされたインクの色の違いです。「光」の色と「顔料」の色が違うのは当たり前と言ってしまうとそれまでなのですが、説明しながら私自身も釈然としませんでした。そこで考えついたのが、TPシートにプリントアウトする方法でした。



題材名は『かくれんぼしてるの、だあれ?』。まず図形ソフトの機能を使い、偶然にできる幾何学的な色と形の平面構成をTPシートにプリントアウトします。これが「ふしぎなようシート」です。次に、不思議な模様の中にかくれんぼする文字や絵を考え、2枚目のTPシートにプリントアウトします。「かくれんぼシート」です。この2枚のシートを重ねOHPでスクリーンに映し出し、みんなで隠されている文字や絵を当てっこし鑑賞しあいました。「液晶表示に近い色で鑑賞したい!」をきっかけに考えついた題材でしたが、OHPで拡大された画面を鑑賞しあうことで、パソコンの小さな画面ではできなかった、全員が一斉に一人一人の作品を鑑賞することができるという嬉しい誤算が生まれました。



◇私も負けずに…

子どもたちに触発され、私自身も情報機器を活用した授業方法を現在も模索し実践することに…

①“発想源”としての活用

写生会の事前にデジカメで撮影した校区の風景を例示し、場所選びのポイントや風景を描くコツなどについて話しました。子どもたちはその日から、登下校時に描きたい場所を見つけたり自分なりの風景を考えたりしてイメージをふくらませ写生会の日を迎えました。

②“鑑賞の場”として

子どもたちの制作プロセスで作品や活動の様子を撮影し見合うことで、より質の高い表現へと練り上げていく資料としての活用方法を考え実践しています。また、インターネットやCD-ROMで国内外の作家作品を鑑賞することで、鑑賞活動の充実、ひいては美術館・博物館との連携にもむすびつくのでは、と考えています。

さきより千式作>ア兵雄 “筆おすや” ◇

◇エピローグ

相変わらず、子どもたちに教えられながらの毎日を送っていますが「実際に手を使うよさ・味わい」を大切にする造形表現活動の中に、いかにパソコンなどバーチャルなものを融合させていくかが今後の私にとっての課題だと考えています。これから、子どもたちの輝く瞳と感性に負けないような「パソコンで頭考」を工夫し励んでいきたいと思っています。

式Jまひは紙